

教職大学院 No. 132 Newsletter No. 132

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科

since2008.4 2020.4.25

VUCA の世界に求められる力を培う学習のために 時空を超える協働探究への挑戦

福井大学大学院 福井大学·奈良女子大学·岐阜聖徳学園大学 連合教職開発研究科

研究科長 柳沢 昌一

流動的で(Volatility)、不確実(Uncertainty)、さらに複雑(Complexity)で、多義的(Ambiguity)な世界。新型コロナウィルスの驚くほどの広がりとそれに対する対処の困難さに直面し、先が見通せない状況の中で、私たちは新しい年度を迎えています。

教職大学院で培ってきたクロスセッションを中心とする学習の形態は、「三つの密」を避けなければならない今の状況の中では、維持するのがもっとも難しい営みとなります。

しかし、他方において、だれもが初めて直面する 状況、確実な解がまだ見定められない状況の中でよ り妥当なアプローチを手探りしていかなければなら ない状況に立ち向かうために、そうした現実の中で 省察し探究しコミュニケーションし協働する営みが あらゆる組織において、そして学校において求めら れていることもまた疑いありません。この困難な状 況の中で、こうした現実に立ち向かう力を培う学習 をどのようにして支えひらいていくか。私たちの実 践的な力が問われていると思います。

コロナ状況の中で、どのようにして教職大学院に おける協働探究のサイクルを維持し、展開させてい くか。2月末以降、刻々と変動する状況を追いながら 模索が続いてきました。3月段階においては、感染対 策を徹底しつつ、対面でのカンファレンスをなんと か実現する方策を探っていました。マスク・手洗い、 距離の確保、換気等の徹底によってカンファレンスをなるべく日程通り実現していくことができないか、と。しかし4月に入り、世界的な感染がとどまることを知らず、福井においても感染が広がり、さらに緊急事態宣言が出されるに至り対面でのカンファレンスは当面困難であると判断せざるを得なくなりました。

しかし、こうした状況の中でこそ、それぞれの持ち場での動きとそこでの問題、そして試行錯誤と模索を共有していくことが必要であることもまた確実です。実際に集まって相談することが困難である中では、テレビ会議システム等を組み込んで、メディアを介して実践的なコミュニケーションを実現していくアプローチを目指していく必要があると判断するに至りました。学校においてもオンラインの授業・学習が求められることになる状況を踏まえるならば、そしてまた奈良・岐阜、あらたに東京・北陸にも協働探究のコミュニティが展開し、さらに世界

内容

お知らせ (20)

巻頭言 (1) スタッフ自己紹介 (2) 院生自己紹介 (5) 2月ラウンドテーブルふり返り (14) 的なネットワークも広がってきている状況を考え合わせるならば、連合教職大学院において総体として協働探究とコミュニケーションのオンライン化のチャンネルを開いていくことは、むしろ十分な必要性と意義を持ちうると判断するに至っています。

一方では、ネットワークを介して双方向のコミュニケーション、そして空間を超えた協働を可能とする多様なテレビ会議システムが開発され、しかもそれを低コストで且つ簡易な形で用いることが出来る条件が整ってきています。従来の一方的な伝達のメディアとは大きく異なりコミュニケーションと協働を支えるシステムの展開が進んできています。教職大学院において培ってきた、互いの実践を深いコミュニケーションを通して支え合うアプローチを、ユニケーションを通して支え合うアプローチを、こうした新しいシステムと結びつけることが出来るならば、時空を大きく超えて専門職としての協働の省察と探究を共有し発展させていく可能性に結びついていくことにもなると思います。

コミュニケーションの基盤となるメディアの転換には、当然そのための時間と労力を有し、それぞれの取り組みに余力がない状態の中ではその転換は容易に進んでいきません。学校においても、また教職大学院においてもそうした状況が続いてきていたと思います。しかし、対面のコミュニケーションの実現が実際に不能になる中では、たとえ試行錯誤や一

定の制限が避けられないとしても、双方向のコミュニケーションを可能とする新たな媒体を利用するアプローチに歩み出すことをためらっていることは許されないと考えるに至っています。

大学院の一元化、学校改革マネジメントコースにおける一年履修の出発、東京をはじめとするサテライト拠点の展開、そしてここ数年急速に進んできている海外研修の本格化。急激な展開に直面する中でさらに新たなアプローチに進み出さなければならない状況に追い詰められたというのが実感ですが、冒頭にも述べたように流動的 Volatility で、不確実Uncertaintyであり、さらに複雑 Complexity であり、多義的 Ambiguity な世界で生きると言うことはそういうことだと思い定めるほかないようです。この状況に立ち向かうことを通して、私たち自身が状況から学び協働の力を発展させていくこと。それは私たち自身がめざす学習の課題と直接につながっています。

まずは自分たち自身の健康管理を徹底し、現状を 見据えその状況の中で学習を維持しつつ、展開可能 性への模索を進める。今日のネットを通じてのセッ ションがそうした粘り強い取り組みのための、一つ のキックオフの機会とできたらと思います。どうか よろしくお願いいたします。



スタッフ自己紹介

発見が位置づいていく学び

福井大学連合教職大学院 准教授 宮下正史



「遠足が好きです」 20代のころ職員会議 で思い切って発言し た。学校が週5日にな り、教育課程における 行事の見直し、精選が 叫ばれていたころだっ たように思います。授

業時数の確保のために遠足を社会見学に統合していったらどうかというのが議題になっていました。先ず教室外の学びが削減されていく、会議の方向性もほぼその方向で決まっていく中で、特に根拠もなく反射的に発言した記憶があります。

4月1日に福井大学教職大学院・准教授として着任 した宮下正史(みやした まさふみ)と申します。3 月までは長野県総合教育センターにおいて、先生方

United Graduate School of Development of Teachers, University of Fukui, Nara Women's University, and Gifu Shotoku Gakuen University

の研修を企画運営していました。長野県から福井に 来て数週間、自宅のまわりを毎日歩くのが日課になっています。そこでの気づきを記し、自己紹介とさせていただきます。

福大前駅の傍らに「底喰川」と書かれた河川改修の石碑があります。「何と読むのだろう」、しかしその意味するところはなんとなく想像ができる。きっと子どもたちもそうでしょう。「先人は、水害に苦しんできたのではないかな」翌日から底喰川に沿って歩くことにしました。東(上流)に向かって歩いていき、明道中学校の前を過ぎると北陸高校の前で川は北に急に折れ、また東へと続いています。閑静な住宅街の中を通り、町屋公園の横を通り抜けるとまた北に急激に折れる。そして藤島通りとほぼ並行して東へ登っていきます。幾度もの河川改修は文京キャンパスの建設ともかかわっているそうです。

さらに別の日、今度は石碑から西(下流)へ向かって歩いてみる。蛇行しながら田畑を抜け日野川に合流する地点には両側に排水機場がありました。平成16年の豪雨災害の後、河川改修が進んだそうですが、この福井の地が川と共に暮らしてきたことが分かります。

歩きながら考える。護岸工事が施され昔とは違った流路でしょうが、幾重にも曲がりくねったそれは自分の経験の中にある、ある川と似ていました。長野県に端を発し、新潟県を通って日本海に流れ出る千曲川(ちくまがわ)です。全国的には日本一長い川、信濃川と呼ばれている川です。

その千曲川を昨年台風 19 号が襲い、長野市長沼地 区では堤防が決壊しました。指導主事になって初め て学校訪問をしたのが3年前の長沼小学校でした。 りんご畑の中にある学校です。子どもたちが、身近 なりんご農家の工夫について体験的に学んでいた授 業でした。

千曲川が善光寺平から北信濃の谷あいに入っていく場所にあたるこの地区は、これまでも何度も水害に見舞われています。その記憶を忘れまいと寺院や公民館には近世以降の水害で浸水した高さが、天井や柱に記録されていました。今回の災害では、小学校や中学校の校舎も1階部分はまるまる浸水し当た

り前だった授業が複数の学校で行えなくなりました。私の元同僚も含めて、多くの子どもの家も被災 しました。

災害から1か月後、災害ボランティアに参加しました。久しぶりに訪れた長沼地区の光景は一変していました。土埃が立ち込め、土台を残して跡形も無くなっている無数の家々、流れてきた瓦礫の山、かろうじて残った家屋も、りんご畑も何もかも泥に埋もれていました。それはあまりに現実離れした景色でした。

ボランティアの参加者は5人ずつのチームになり ます。割り当てられたお宅は、1階部分が流され、柱 だけが残り、床下まで泥が入り込んでいました。床 下に入り泥を掻き出していきます。膨大な泥の量に 終わりが見えません。誰もが家主の方の心中に思い を馳せます。季節は冬に向かう11月。寒風吹きすさ ぶ中、チームでお互いに励まし合いながら作業を続 けました。この日も何百人ものボランティアが日本 中から参加していました。妻と私以外の方々は県外 から駆け付けてくださったご家族でした。中学生の 息子さんは、泥にまみれ黙々と額に汗して働いてい ました。わざわざ遠くから何時間もかけて手弁当で 駆けつけてくださったことに驚きました。多くの方 が県外から来てくださっていました。困っていると きに支え合う姿に触れ「日本も捨てたものじゃない な」と感じました。同時に「自分は学校で子どもた ちに何を伝え、育んできただろうか」という思いが 沸き上がっていました。

散歩での発見から、思いもかけず底喰川(そこばみがわ)と千曲川がつながり、過去の経験が掘り起こされて位置づいていく、「体験から始まり、広がって、繋がって、腑に落ちていく」そんな必要感に根差した学びに教職大学院での学びを通してたくさん出会いたいと思います。その学校、その先生、その子たちだからこそできる学びを大事にしながら。

ちなみにご家族は福井の方々でした。きっと息子 さんの人生の中でこの体験がアンカーとなり、意味 づけられていくのでしょう。私がここに来たご縁を 感じています。福井の教育に学びたいと思います。

教職大学院における"結"の継承



福井大学連合教職大学院 講師 宮本雄太

初めまして、4月1日 付で着任致しました宮 本雄太と申します。私の 専攻は、保育学・幼児教 育になります。福井と私 との関係は、昨年一年の 間に数多くの電撃的な

ご縁があり、今この場におります。これは、福井と 私とのつながり"結"だと感じています。

"結"という言葉との出会いは、沖縄の幼稚園訪問でした。園は、突撃訪問でしたが温かく受け入れてくださり、最後に次のような言葉をかけて頂きました。「これは、今後保育に携わるあなたに私たちがバトンを渡しただけ。だから、あなたももし同じようにバトンを繋いでいって欲しいの。これはね、沖縄で"結"っていうのよ。だから、私たちとあなたも"結"。これは、私たちが未来につなぐ未来、架け橋なの。昔の言葉なんだけど、私たちは誇りに思っている言葉よ。」10年前にかけてくださったこの言葉は、今でも決して色あせることはなく、私自身の人生の道標になっています。

さて、前置きが長くなりましたが、私は、これまで関わってきた人、これから関わる人にどのような "結"をつなぎ、どのようなバトンを渡せるのか。これは、福井大学に着任してからも考えています。 当然結論はすぐに出るものではありませんが、今思っていることを書きます。

「常識」とは、あなたが18歳までに身につけた「思い込み」の集大成である。

これは、物理学者であるアインシュタインが呟いた一言です。この言葉は、特に教育という場においても問い直すべき有効な言葉だと思います。その一方で、常識という伝統が日本の教育を培ってきたこともまた真実です。現代の教育は、「古き良き時代か/革新的な時代か」といった二項対立図式に当てはめてしまう傾向にありますがそうではありません。松尾芭蕉は、次のような的確な言葉を残しています。「古人の跡を求めず、古人の求めたるところを求めよ」、つまり温故知新ですね。伝統を重んじ、築き上げてきた知見の中から新しい意味や価値を見出すことです。この教職大学院が求めていることは、まさにこの点にあると私は考えています。

この教職大学院で学ばれている方は、インターンを含め、皆が教育という現場で子どもたちとともに日々を懸命に生き抜いておられると思います。その中で、教育・保育環境に特化した視点を持つ人、子どものやる気スイッチを見つけるのに特化した視点を持つ人、教育・保育思想や哲学と子どもの姿との関係に特化した視点を持つ人、など各々が教育・保育に対して持つ視座は多様だと思います。これらは、どの視点が優れていて、どの視点が劣っている、という判断はできません。それは、「故きを温ね」た場所が多様で、その中で「新しきを知る」視点も人ぞれぞれだからです。

教育・保育は、時代の潮流や社会的制約を受ける 場でありながら、子どもが健やかに育ち、全うな倫 理観を持った社会人として自律していくといった、 流行と不易が織りなされる複雑性のある場です。そ の窮屈な世界を生きる我々は、どのような視座を持 つべきなのでしょうか。その一つの解は、日本の文 化性にあると思っています。日本の特筆すべき文化 の一つに、色の多様性という側面があります。江戸 時代には、奢侈禁止令という"贅沢は敵だ"という 法令が出されました。その窮屈な時代に、町人は「四 十八茶百鼠」という、茶系鼠系等の色に感性、審美 性、工夫を用いて解釈を広げることで対抗しました。 これは、教育・保育に重要な視点を投げかけている と思います。まとめますと、1)常識にとらわれず、 しかし常識が示す本髄から学ぶ視点を持つこと、2) 時代の文脈性と子どもの真正性の間にある制約は、 工夫や可能性を生み出す装置である、でしょうか。

教職大学院は私たちに自分自身の価値観を逸脱した他者との出会いをもたらし、自分自身の視点を拡張させ、各々の現場に新しい視点を提示してくれる場です。教職大学院を希望された皆様はそれぞれの立場で、子どもへの援助や職員間の協働にどのようなあり方が求められるのか、どのように若手を援助したら良いのか、どのようにマネジメントをしていくのか、といった問いに向き合っていることと思います。これらは、実践をより良くしようとする志向性という点において共通性を持ちます。是非、この教職大学院で多様な"結"を結び、対話を通して常識を問い直しながら色々な工夫を提示し合うこと

で、個々の実践や学校・園の"質"の深化への手がかりを掴んで頂ければ幸いです。

私自身もまた、日々の皆様の心の揺れ動きを共に 味わいながら、多様な語りを通して"結"を作って いきたいと思います。そして、皆様が大学院を巣立 たれる時に、大学院でそれぞれに育んできた"結"を自信と武器にして、また見えない未来、不確定な 現実に向き合っていくことを支えられたらと思って います。よろしくお願い致します。

院生自己紹介



揚原 佑 あげはら ゆう

初めまして。こ の度、福井大学院の 合教職大学院の 業研究・教職専門 性コースに入学で ました揚原佑で す。

昨年度までは埼

玉県にある東洋大学の学部応用化学科に所属していました。取得免許は中学校(理科)、高校(理科)です。 私は高校まで福井にいたのですが、小さな頃からの 夢だった箱根駅伝出場を叶えるべく、東洋大学へ進 学しました。しかし1年目で、怪我、病気をしてしまい、退部を余儀なくされました。

退部を経て、飲食店でアルバイトを初め、店長代行者を任せられ新人教育に携わったり、Mステでミセスグリーンアップルにハマって、北は北海道、南は沖縄まで全国飛び回るくらい好きになったり、友達の紹介で空手道部に所属したりするなど色々な縁があり、成長し続けられた4年間だったと自負しています

中学校、高校の陸上部顧問の先生からは競技面のみならず、人格形成に大切なこととして礼儀や自ら競技、勉学を考えて行うことの大切さなど色々なことを学びました。そこで私も先生方の様に、素晴らしい先生を目指したいと思い、教職を履修していました。しかし2年生、3年生と本当に教師を目指すのか、迷っていた時期がありました。そして内定を5社いただいていた中で、中途半端な気持ちで4年の教育実習を迎えました。そこでは生徒が、最初からとて

もフレンドリーに接してくれる反面、授業を行う際には真剣に、真面目な表情で聞いてくれて、3週間という短い期間でしたが、成長を実感出来ました。教育実習期間中に、生徒たちと共に、成長し続けられる職業である教職に携わりたいと思い、内定を全て辞退しました。しかし教員採用試験の願書を昨年は出してなかったこともあり、研究室の教授や、教職の先生に相談したところ、教職大学院に進学し、研究を通して、教職に関する知見を深める選択肢もあると勧められ、その中で本学は地元の大学で、教職の先生からは、理論をしっかりと実践に活かすような研究が出来ている教職大学院だと太鼓判を押されたこともあり、進学を決意しました。

大学院進学後は、教育学部ではなかったため、教育に関する知識が恐らく周りの人達よりも劣っていることもあり、そこで皆さまには色々とご迷惑をおかけするかもしれません。そんな時は優しく助けて下さいね。お願いします。また私は小学校免許プログラムでの、小学校と特別支援学校の免許取得を目指しています。将来教員になる上で重要な発達段階の子どもたちの特徴を知ることで、その特徴に見合った学習の方法を模索していくためには、小学校と特別支援学校の免許を取得することが適切ではないかと思ったので、履修を志しました。

インターンシップや、カンファレンス、ラウンドテーブルといった様々な学びの場を最大限に活かして、自分の成長に存分に繋げていきたいと思いますので、何卒3年間という、長くも短い期間だと思いますがよろしくお願いします。



荒木 裕里香 あらき ゆりか

はじめまして。今年度から 福井大学連合教職大学院の 授業研究・教職専門性開発コ ースに入学しました、荒木裕 里香と申します。昨年度まで は、広島大学教育学部・教育

学系コースに所属していました。また、小学生の時からずっとサッカーを続けており、大学でも女子サッカー部に所属していました。サッカーを続ける中で、サッカーの審判員に対する興味も徐々に強くなっていき、選手と審判員、両方での活動を続けてきました。

広島大学の教育学系コースは教員養成課程ではなかったため、学部時代には、教育学を中心に学んできました。私は高校まで受けてきた教育に様々な疑問を抱いたことをきっかけとして、教育についてより広い視野で学びたいと思い、広島大学の教員養成課程ではないコースを志願しました。このコースで、私が一番深く考え、学んだことは「批判的思考」についてです。広島大学の教育学部では伝統的に「批判的思考」を重視しています。ここでいう「批判」とは、「非難」することではなく、普段、何気無く流してしまうような事柄でも、一度立ち止まって、「なぜ」と問いかけることであり、物事の真価を問い直し、見出していく営みのことです。この批判的

思考は、私の教育に対する考え方を構築する上で重要な基盤となりました。

連合教職大学院で学ぶことを決めたきっかけは、 昨年6月のラウンドテーブルに参加したことです。 そこでは、広島大学と福井大学との空気感の違いや 学びの性質の違いについて触れたような気がして、 学部時代とはまた違った視点で教育が学べるのでは ないかと考えたためです。また、生まれ育った福井 を離れてみて、この4年間で福井県がどのように変 わったのかということを思った以上に知らないとい うことを感じており、将来的に、福井県で教員をす る上では、その土地ならではの教育を学ぶ必要があ ると考え、この連合教職大学院で学ぶことを決めま した。

大学院では学部時代に十分に身に付けることのできなかった、実践力を一番に培いたいと考えております。また、インターンを通して、実際の学校現場で起こっていることを体感しつつ、学校をよりよくするためには何が必要なのか、自分にいまできることは何なのかを考えていきたいと思っています。そして、教育について、より深く考えを深めていき、学校拠点方式でしか学ぶことのできない学びを得て、自分自身の成長に繋げていきたいと考えております。ご指導のほど、よろしくお願いいたします。



蟻塚 知都 ありづか かずと

はじめまして。今年度より、福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました蟻塚知都と申します。取得免許は小学校一種、中学校一種(美術)、高等学校一種(美術)です。前年度

まで、福井大学教育学部にて教育と美術、特に彫刻分野について研究してきました。

私は学部では、作品の制作を積極的に行ってきま した。制作の研究テーマは、木彫による人体表現で、 木と、彫刻と、人間ということについて海外に赴き 人間を観察したり、木材にかかわるお仕事をさせて いただいたりと学外での実践的な活動を中心に研究 を行いました。本研究では作品を制作するうえで 様々な人間を観察しましたが、それは同時にその人間を取り巻く社会を見ることにもつながることにを が付きました。教師という仕事は、児童、生徒を予測不可能な社会に送り出していく役割があると思います。とすれば社会に敏感でなければならない教を という職業を志す者において、この経験は非常にったことで彫刻における形や量、動きといった重要であったと思います。また、積極的に制作を行ったことで彫刻における形や量、動きといった重要が 諸要素についても深く考えることできました。 諸要素についても深く考えることできました。 ませんが、私の場合はあらゆる教育的な言葉や考えが せんが、私の場合はあらゆる教育的な言葉や考えが 制作をもとにしていると思います。とくに教育の めに制作をしているという意識はありませんが、ふと めに制作を通して美術で伝えなければならないことがふと 浮かんできたりします。 美術という教科は周辺教科と言われて久しく、公教育において必要ないという否定的な意見も少なからず耳にします。また教育実習などの数少ない経験の中ですが教育現場と大学で学ぶ美術教育との間に大きなギャップも感じました。しかしながらこのように美術は否定されるからこそ驕ることなく深く省察を繰り返していくことのできる教科であり、また、規則などなく、自分の中で前提と思っていたものを

何度も壊して絶えず変化させていくことのできる教 科であると気づきました。

私はこれから大学院で、なぜ美術が必要か、今まで自分が美術において大切であると感じたことをどのようにして生徒に伝えるか、また、大学で学ぶ教育と実際の教育現場とのギャップをいかにして埋めていくかということについて制作を通しより深く研究していきたいと思っています。これより2年間どうぞよろしくお願いいたします。



今中 勇樹 いまなか ゆうき

初めまして。今年度より福井 大学連合教職大学院授業開発・教職専門性開発コースに入 学いたしました今中勇樹と申 します。学部生時代は工学部に 所属していたため取得済みの

免許はありません。大学院では中学校一種(理科)、 高校一種(理科)取得を目指します。

私は、福井県出身で学部も福井大学出身です。工学部の化学系の学科に在籍していました。この学科に進学するきっかけは中学生の時にあります。中学生の時に習った酸素が発生する化学式 2 H₂O₂→2 H₂O+O₂ (触媒:二酸化マンガン)の「触媒」がどういったものかわからなかったため、理科が好きだったこともあり先生に質問しに行きました。先生は「大学に行ったら習うよ」と答えてくれました。そこから化学系の大学に進学しようと考えていました。そういったこともあり、地元の大学であり、化学系の学科であった福井大学工学部材料開発工学科に進学しました。

学部時代は、福井大学工学部材料開発工学科に所属しており、化学をメインに物理や数学を学んでいました。卒業論文は無機材料リサイクル分野の「溶融塩を用いた白金族の水溶化処理」について行いま

した。工学部に在籍していたため全く教職関係の講 義を受講していませんでした。そんな私がなぜ教員 を目指そうと思ったかといいますと、元々勉強を教 えることが好きだったこともありますが、学部時代 を通して「理科」という科目に対する感覚が大きく 変化したことが大きな要因です。中学校・高校と「理 科」は所謂「暗記」教科であるという認識が強かっ たです。しかし学部時代を通し、その認識が「理科」 という教科の本質と大きく異なっていると感じまし た。確かに、中高での理科は暗記が主体であること は否めません。それが、理科に対する「苦手」、「退 屈」という感覚につながってしまい「理科」嫌いに つながっていると思います。しかし、理科は暗記で 覚えた知識を活かし応用するところに楽しさややり がいがあると思います。そういった学部を通して学 んだ「理科」の楽しさを伝えたい・教えたいと強く 思い教師になることを決意しました。

私は、今年度から教職に関することを学ぶ初学者の立場になります。大学院の先生方、インターンシップ配属校の先生方はもちろん、先輩方、すでに教職について学んでいる同期様々な方から沢山のことを吸収してよい教師になれるように頑張っていきたいと思います。3年間よろしくお願いいたします。



岩城 つばさ いわき つばさ

初めまして。この4月より授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました岩城つばさと申します。昨年までは、愛知県にあります日本福祉大学の子ども発達学部・子ども発達学

科・学校教育専修に在籍しておりました。取得免許 は小学校教諭一種です。また、大学院在籍期間中に 特別支援学校教諭一種の免許取得を目指しています。

日本福祉大学での4年間では、学部の授業やゼミ活動、ボランティア活動、研究会への参加、そして教育実習などを経験し、非常に充実した時間を過ごすことができたと実感しています。その中でも、ゼ

ミ活動と教育実習では本当に多くのことを学ぶこと ができたと同時に、自分自身の課題も見えてきまし た。ゼミ活動で取り組んだ卒業論文では、吉野源三 郎が著した「君たちはどう生きるか」という小説を もとに、現在の日本における道徳教育について考え ました。文字に限りがあるので卒業論文についてこ こで詳しく述べることは出来ませんが、道徳教育の あるべき姿を考えてきた中で、私に、子どもが「考 える」授業を教師としてつくりたいという想いが芽 生えました。そして教育実習ですが、私は、小学校 と特別支援学校で一度ずつ、計二度教育実習を経験 しました。この教育実習で私は前にも述べましたが、 自分自身の課題にぶつかることになりました。子ど もを中心とした、「考える」授業をつくりたいと考 え、研究授業などで取り組もうとしましたが、なか なか形にすることが出来ませんでした。自分の理論 を授業の中に落とし込むことの難しさを痛いほどに

感じ、その経験から私は、クラスや自分の目の前にいる子どもの生活や現実を踏まえた上で教師として何が出来るのか、どのような授業を行うべきなのかといったことを実践の中で考えていきたいと思うようになりました。

教職大学院では、インターンシップ先の先生方や 大学院の教職員の力をお借りしながらも、実践と省 察からまた実践を繰り返すことによって自らの授業 力を高めていき、子どもが「考える」授業を形にで きるように努めていきたいと思っています。また、 学校現場の一員として加わることに自覚を持ちなが ら、周りの先生方と積極的にコミュニュケーション を図ることで、学校や地域とのつながりの中で教員 としての総合力を高めていきたいと思っています。 まだ、至らないところが多くあると思いますが、2 年間で成長できるように精一杯頑張っていきますの で、どうかよろしくお願いします。



大西 美穂 おおにし みほ

はじめまして。今年度から 連合教職大学院の授業研究・ 教職専門性開発コースに入学 することになりました大西美 穂です。昨年度3月までは、 福井大学教育学部の初等教育 コースに所属していました。

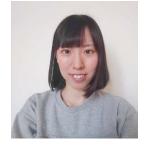
取得免許は、小学校一種、中学校一種(数学)、高 等学校一種(数学)です。

大学では、教育学部に所属していたこともあり教育実習や大学独自の取り組みである探究ネットワークなどを通し、多くの子ども達と関わる機会を得ることができました。卒業研究では、「多面体の展開図」について1つの多角形からどのような多面体を得ることができるのかを研究しました。さらに、この研究の教材化を行い、実際に一般の方(小学校5年生以上)を対象にした公開講座を実施しました。学外の活動としては、アルバイトで個別指導塾の講師と福井児童科学館の支援員を経験しました。特に、福井児童科学館では、小中学生の子ども達だけでなく、乳児期や幼児期の子ども達との触れ合いも経験することができました。また、ボランティア活動として、小中学生対象の学習支援にも参加しました。

このような 4 年間の大学生活の中、自分に最も影響を与えたのは 3 年時の教育実習です。日々子ども

達の成長を支える教師の大きな責任とともに、成長 を促すための細かな手立て、そして、発問や問い返 しなどから児童の意見を拾い、取捨選択し、授業を より深める教師の技能にとても感動したことを覚え ています。特に、授業では児童の実態、変化を把握 することが必要不可欠なことを実感しました。また、 1日の最後に行われる振り返りでは、児童の実態を把 握しているからこそ生み出される意見やアドバイス をたくさんいただくとともに、自身の反省からだけ でなく、他者の意見を取り入れることで、より自身 の成長へ繋げることができるという意見交流の大切 さも実感することができました。これらのことから、 実際の学校現場と関わり、そして先生方や先輩方、 同期との意見交流などを通して学び続けることこそ が自分自身の大きな成長へ繋がると思い、大学院へ の進学を決意しました。

大学院では、お忙しい教職大学院の先生方やインターン配属校の先生方の貴重な時間をいただくと共にご迷惑をおかけすることになると思いますが、自身の成長、そして、その成長が将来関わる子ども達の成長や学校現場での力になることができるよう日々努力していきます。これから2年間どうぞよろしくお願い致します。



加藤 もも香 かとう ももか

はじめまして。今年度より 教職開発専攻授業研究・教職 専門性開発コースに入学し ました、加藤もも香と申しま す。昨年度3月までは、富山

大学医学部看護学科に所属していました。大学院では、小学校二種、特別支援学校一種を取得し、特別 支援学校教諭になるための実践・研究に臨んでいき ます。

富山大学では、主に小児看護学を中心に学んできました。小児看護学の中でも、入院中の子どもの学期入院を経て久しぶりに学校に復帰した子どもの学期入院をしている子どもたちは、入院による体力に遅れが生じてしまうことや、病気による体力間関係など、身体面・精神面さまざまな場面において時でなど、身体面・精神面さまざまな場面においの時による上がわかりました。私が病棟実習の日での入院による影響に対応すると学びました。そういった入院による影響に対応するためには、医療者だけでなく、教育関係者との関わりも重要であると学びました。また、地域看護学の実習におい

て、医療的ケアを受けながら自宅で過ごす子どもと 関わる機会がありました。近年、病院内ではなく自 宅で過ごす医療的ケア児が増えてきています。 支援 学校において、そのような医療的ケア児との関わり を学んでいきたいと考えております。

看護学科に通ってきた私が教員を目指した理由と して、上記の、長期入院児の復学支援に関わりたい ということや、地域で暮らす医療的ケア児の教育面 での支援を行いたいというものの他に、もう一つあ ります。それは、私の身近にいる発達障害を持つ子 の存在です。その子が学校生活や進学の際に困って いる姿を見て、発達障害や学習障害を持っている子 どもたちが、その子らしく、楽しんで学校生活を送 っていけるような支援ができたらいいと思いました。 これから始まる長期インターンシップや大学院で の活動を通して、教員としての知識・技術はもちろ ん、人としても成長していけるよう努力していきた いです。指導してくださる先生方やインターンを受 け入れてくださる福井大学附属特別支援学校の方々 への感謝を忘れず、たくさんのことを学んでいきた いと思っております。3年間よろしくお願いいたしま す。



川﨑 太地 かわさき たいち

初めまして。今年度、福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました川崎太地です。昨年度までは、京都外国語大学外国語学部に在籍し、協定校である佛教大学でも通信教育で学ば

せていただきました。取得免許は、小学校一種、中 学校一種(英語)、高等学校一種(英語)です。

中学生の時の修学旅行で、私は外国人の旅行者に話しかけられたことがあります。緊張しており、文構造も滅茶苦茶な英語だったと思います。しかし、コミュニケーションは取れました。この時私は、授業で習うような完璧な英語ではなくてもコミュニケーションは取れるということに気付き、それと同時に自分の中の世界が広がったように感じました。この経験から、私は子どもたちに受験のための英語で

はなく、自分の世界を広げるための英語を学んでほしいと思うようになり、英語教員を目指しました。

教育実習では、分かりやすい授業をメインに取り 組みました。ですが、一度の解説で全員に一様に理 解させることは難しく、同じ事柄の指導であっても 様々なアプローチ法を持っておくことが大切だと感 じました。また、分かりやすい授業ばかりを目指し てしまうと子どもたちを主体とした授業を展開する ことが難しくなることも学びました。

大学院でともに学ぶ院生の方々や長期インターンシップの配属校先の先生方などからアプローチの方法を学んだり、話し合う中で新しい方法を見つけたりしたいと考えています。さらに、私は教育学部出身ではなく、教育に関する理論を実践する場も少なかったため、長期インターンシップを通して多くの経験を積んでいきたいと考えています。また、自らの授業を院生や先生方と振り返り、今までの自分になかった考え方や視点を見つけ、そこから授業を見

つめ直し、分析し、改善していきたいと考えています。授業だけでなく、子どもたちとの関わり方や教員同士の連携、保護者との関わり方についても学んでいきたいです。特に、子どもたちと正面から向き合って指導していくために、彼らの発達段階に合わせた教員の方々の接し方や指導の仕方を学び、子どもたちとの適切な距離感を学んでいきたいと思います。

今後の大学院やインターンシップでの学びは正直 不安ばかりですが、日々、自分の課題や改善点など と向き合い、解決策を考えながら教員になるための 土台を作るために努力していきたいと思います。2 年間よろしくお願いします。

川西 雄太郎 かわにし ゆうたろう

はじめまして。4月から福井大学教職大学院に入学した、川西雄太郎と申します。 所属は授業研究・教職専門性開発コースの授業研究専門性開発アプローチ(4系)になります。昨年度3月までは福井大学教育学部中等教育コース(社会科専攻)に

所属していました。取得免許は、小学校一種、中学校一種(社会)、高等学校一種(地歴)(公民)の 4 つです。

学部での 4 年間では、初等・中等教育や社会科教育などについて学んできました。また、福井大学独自の取り組みである「探求ネットワーク」「ライフパートナー」などの活動にも携わってきました。

大学の学びの中で特に社会科教育については、ゼミに所属していたこともあり、学ぶことが多かったと感じています。卒業研究は「小中社会科の連携・接続を実現するための授業の在り方の研究—政治学習を事例にして—」をテーマとして、社会科の小中連携の在り方に関して研究を行いました。そのような研究やゼミを通じて社会科教育の現状や課題、これからの社会科教育の在り方、その在り方を実現するための具体的な方策など、様々な見識を得ることができました。

その中で培った社会科に対する一つの認識として、「社会科は中核教科である」というものがあります。「教科等横断的な学び」という言葉があるように、現在では複数の異教科における連携が求められるようになってきました。そのような中において、社会科は「様々な教科で培った力を複合して発揮する教科」であると位置づけることができます。たとえば、数学科ではデータ処理の能力、国語科では言語活動の能力などを培いますが、それらの能力を活用して現代社会の実際的な問題を考えるという点で、社会科は他の教科をまとめる「核」だということができるでしょう。また、社会科は社会に生きるより良い市民の育成に「直接的に」つながってくるという意味でも重要な教科だと言えます。(社会科以外の教科が重要でないということではありません。)

しかしながら、以上のように重要な筈の社会科の 指導技術や構想力が、現状では自分に不足していま す。だからこそ、社会科の指導技術や構想力をさら に高めていきたいと思うようになりました。それが、 私が福井大学教職大学院に進学した動機になってい ます。これからの2年間では、社会科等の授業力や 児童・生徒との係わり方を最大限磨いていくつもり です。また、教科等横断のような「ヨコ」のつなが りだけでなく、小中を通じた「タテ」のつながりに ついても学んでいきたいと考えています。

何卒、よろしくお願い致します。



木原 万由子 きはら まゆこ

初めまして。この度、授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました、木原万由子と申します。取得免許は高等学校一種(地理・歴史)です。

①大学生活について

昨年度までは、兵庫県にある関西学院大学社会学部社会学科に所属していました。社会学部は、ジェンダー問題や地域社会に対する問題、メディアリテラシー、民俗学など、主に現代社会を構築している様々な分野について幅広く学ぶ学部です。私はそれらの中で、心理学に興味があったため、主に社会心

理学や教育心理学について学べるゼミで勉強していました。

また、他学部の講義を気軽に受けられる大学だったので、教職の他に文学部の日本史や日本文学の講義に参加しました。さらに、立地環境が素晴らしく、日本文化に身近に触れられる環境だったため、寺社巡りをしたり、能を習ったり、巫女の助勤をするなど、存分にその環境を満喫してきました。

②大学院で学ぼうと思ったきっかけ

大学院で、教職についてもっと学びたいと思った きっかけは、学部 4 年次の教育実習です。先生方の 授業を見学させていただく中で、一つ一つの授業の 裏には、先生方の血のにじむような努力と工夫が詰 まっていることに気づきました。そして、授業の奥 深さを知り、自分も生徒の為になる面白い授業をや ってみたいという気持ちが芽生えました。実際に、 試行錯誤しながら工夫した部分について、生徒が応 えてくれたり、うなずいてくれたりしたとき、とて もやりがいを感じました。また、授業後に先生方か ら科目の垣根を越えた感想やアドバイスをいただい たとき、プロの視点からの的確なアドバイスを受け て授業が洗練されていく過程を面白いと感じました。 先生方や生徒と、しっかりとコミュニケーション を取りながら、楽しくて為になる授業作りをしたい。 先生方の授業をもっと見学し、自分の授業に取り入 れていきたい。その思いで本校を選びました。

③今後の抱負

大学院での3年間は、教育という分野に触れてこなかった私にとって、教育学や学校、人との関わりについて多くのことを学べるチャンスだと思っています。また、カンファレンスやラウンドテーブルなど様々な考えをもつ人と関わる場も多いです。この機会を大事にして広い視野をもちながら、何事にも積極的に取り組む大学院生活を送りたいです。

また、生徒と長い期間しっかりと関わっていくインターンシップは初めてです。これからの人生に関わる大切な時期に「先生」として関わっていくので、慎重に、かつ責任感を持ちながら一人一人に対して真剣に接し、共に成長していきたいです。

そして、今ある環境に感謝しながら、謙虚な心構 えで大学院生活に臨んでいきたいです。 精いっぱい 頑張ります。よろしくお願いいたします。

髙島 伊吹 たかしま いぶき



初めまして、今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました髙島伊吹と申します。昨年度までは富山大学工学部機械知能システム工学科に所属していました。

大学では、画像内の物体位

置を検出する画像検出分野を企業と合同で研究していました。今までは多くの時間を知識の習得に費やしてきましたが、研究を行うことで、今までの経験や知識を使い問題を解決したり、実利用に向けて活用することで、学習することの意義をより深く知ることが出来ました。また、論理的に研究を進めるということに対して、論理的に考える力を身につけることが出来ました。勉強はただ単に知識を身につけることが出来ました。勉強はただ単に知識を身につけるのでなく、どのように学んだことを使うのかが大切であることに気づきました。私は、この経験を活かし、より深い学びのある授業を行える力を身につけたいと考えています。

4年間、工学部に所属していた私が教師を志すきっかけになったのは、学習塾でのアルバイト経験でした。そこでは多くの子どもたちと関わる機会がありました。教育者は子どもたちの成長を促す存在と考えていましたが、それだけでなく、子どもから多くのことに気づかされ、子どもたちと共に成長する存在であるということに気づかされました。そこで私は、子どもたちの成長の手助けをするとともに、学校という場所で、様々なことを学び、それを還元できるような存在になりたいと思い、そんな教員になるために、この大学院に入学しました。

教育について学んでいく中で、教育という学問は 大変複雑だと感じました。子どもたちは勉強、友人 関係、家庭、将来についてなど、様々な不安を抱え ています。また、教員は授業だけでなく、学校運営 や生徒指導など様々な仕事、役割があります。長期 インターンシップを通して、授業は勿論、生徒との 関わり方やどのように学校をより良くしていくのか、 様々なことを学び、自分自身の視野を広げていきた いと思います。また、その中で常に目標を持ち、1 日1日を過ごしていきたいと思います。教員として、 また、人として常に成長していけるよう努めます。 現場で実際に先生方や、子どもたちに関われるというのは、勿論不安もありますが、それ以上に学びに対する期待があり、大変楽しみです。ご迷惑をお

かけすることもあるかと思いますが、ご指導のほどよろしくお願いいたします。



太刀川 京 たちかわ きょう

はじめまして。4月より教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学することになりました太刀川京です。昨年度3月までは、福井大学教育学部学校教育課程中等教育コースの理数・生活教育

サブコースの数学科専攻に所属していました。

取得免許は、小学校 1 種、中学校 1 種(数学)、高校 1 種(数学)です。

大学では、子どもたちと関わる機会の多い学生生活を送りながら専門数学を学んできました。アルバイトでは児童クラブ支援員を、大学内で取り組んでいた探求ネットワークでは、ふれあいフレンドクラブに所属し、3年間特別支援学校に通う小中高の子どもたちに合わせた活動の企画・運営を行いました。専門数学では解析学、幾何学、確率・統計等を学びながら「グラフの一筆書き・周遊問題」というテーマで多面体の一筆書き、頂点巡りについて考察しました。そのテーマをもとに、昨年度12月に小学4年生以上を対象として25名の参加者に対して授業を3時間行い、小学校でも算数に授業で取り入れる事ができるにではないかという手応えを得ました。

もともと私は、中高の数学の教員を志望して中等教育 コース数学科に入学しました。しかし、数学教育を学ぶ 中で数学のつまずきが小学校で学ぶ算数の中にあるこ とを学び実際の中学校の現場でもそのような様子が見受 けられたことから、小学校算数での指導を行いたいと思うようになった事が小学校教員を志望するようになった一つの要因としてあります。また、アルバイトでの児童クラブ支援員の経験、ライフパートナーという小学校の1クラスに入り気がかりな子への支援をする中で、長期的な視点で子どもの成長に携わりたいと強く思うようになったことも小学校教員を目指すきっかけになりました。

大学院では長期のインターンシップを通して、児童との関わり方、授業実践、教員間の連携、教師の仕事を深く知りたいと考えています。特に、学級経営については今まで短期間の教育実習等では学ぶことができなかったため、1年間の運営を学びたいと思っています。良い授業の前提は良い学級経営だと考えているため、「良い学級経営とは何か」を現場で学び、カンファレンス・ラウンテーブル等を通して自分の考えを深めていきたいと考えています。授業についても現場で見る中では常に「自分がその単元を指導する立場ではどうするか」を考えながら、実践を行う際も準備だけでなくその授業実践がどうだったかを振り返り、その次に生かせるようにしていきたいです。

大学4年間で学んだことを活かしながら次のステップ へ進めるよう大学院で、実践や研究を努めていきたいと 思います。これから2年間どうぞよろしくお願い致しま す。



畑中 良太 はたなか りょうた

この 4 月より、授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました畑中良太と申します。昨年度 3 月までは、福井大学教育学部、芸術・スポーツコース、音楽科専攻に

所属していました。取得免許は、小学校 1 種、中学校 1 種(音楽)、高校 1 種(音楽)で、中学校の音楽の教員を目指しています。

学部時代にはピアノを専攻していました。ピアノは6歳の時に2つ上の姉の影響で習い始めました。 最初はこんなに長く続けるとは思っていませんでし たが、気付けば今年で17年目です。私は大学入学当初、音楽のどの分野を専攻しようか迷っていました。ピアノを専攻したい気持ちはありましたが、学校現場では生徒にピアノを教える事なんてほとんど無く、今以上の高度な技術や表現力は必要ないのではないかと考えていたからです。しかし、「専門楽器は教員になる上での自分の強みになる」という先生の言葉に背中を押され、ピアノを専攻することを決めました。その言葉通り教育実習では自分のピアノ力が生きる場面が何度もありました。人前でのプレッシャーのかかる演奏やピアノと向き合い黙々と反復練習をすることは、学習では得られない貴重な経験であり、自分の人間力を高めることができました。大

12 United Graduate School of Development of Teachers, University of Fukui, Nara Women's University, and Gifu Shotoku Gakuen University

学院でも引き続きピアノを専攻し、自分の強みを伸ばしていきたいと思います。

また、大学院では 2 年後に教員になることも見据 え、音楽教育の分野を特に学びたいと思っています。 多くの学校現場では、学習指導要領を拠って立つ理 論として実践が行われています。また、その理論に 先立つものとして、実践者の哲学や信念といったも のが実践の内容に大きく影響してきます。ピアノば かり弾いていた私には授業を立案するうえでの理論 や、基となる哲学、信念といったものが不足してい ます。学部時代に熱心に取り組んでいた探求ネット ワークという活動のおかげで、教育実習の時には子 供達と良好な関係を築くことはできました。しかし、 肝心の授業の内容としては担当教員に「内容の引き 出しが少ない」という風に言われてしまいました。 音楽の授業は目的や手段が明確ではないと技術だけ を上達させる活動になってしまう事があります。ま た、同じ授業内容でも教師がもつ引き出しの多さで 学びの濃さは全然違うものになります。インターン シップでは理論と実践の往還を大切にしながら、実 践のより良い方法や内容を学んでいきたいです。

内容の濃い 2 年間となるよう努力していきます。 ご指導よろしくお願いします。



福田 裕理 ふくだ ひろみち

初めまして。本年度4月より授業研究・教職専門性開発コース4系に所属することとなりました、福田裕理と申します。福井県の嶺南地区が出身で、大学進学のため4年前に初めて嶺北に住み始めた

頃は他県に訪れたような感覚がありました。昨年度3月までは福井大学教育学部の初等教育コースに所属しており、尚且つ美術を専攻していました。学部所属のうちに高等学校美術1種、中学校美術1種、小学校1種の教員免許を取得済みです。これから2年間のインターンシップでは福井大学附属義務教育学校後期課程に配属されることとなりました。

学部の頃は美術の中でも絵画を専攻しており、大型の平面作品の制作を繰り返していました。卒業研究の制作では大型の絵画作品5枚を描き上げました。大きな作品は小さな作品に比べて制作過程での分岐が多く、且つ制作時のワンアクションの動きも大きいものになると感じており、学部時代の大型絵画制作を通して「表現する」という行為のゲーム性をより深く味わうことができたのではないかと考えています。つまり、作品そのものだけに魅力があるわけではなく、表現の過程にも魅力的な内容が含まれているということに気付かされたということです。

教科としての美術の授業の中では、作品制作等の 具体的な行為を通して学びを得ることが醍醐味であ り、内容に重きを置くことが必要とされるのではな いかと考えています。しかし、この内容を感じ取っ てもらうためには、教員本人が美術の内容に充分に 浸っている必要があると考えます。私は学部の4年 間を通して、絵画・彫刻・デザイン・工芸・美術教 育…と広範囲で学ぶ機会を得たものの、4年間ではま だ少し足りないような気がしました。この物足りな さに係ってくるものは、美術や表現の内容への浸り 具合にあると考えています。卒業制作を経てやっと ペースを掴んできたと思った矢先に大学を離れ、制 作や表現の活動からも離れてしまうというのがもっ たいなく感じました。そのため、大学院に進み、制 作と制作に係る研究を続けることが自分に適した選 択だと思い、福井大学にあと2年残ることにしまし た。また、この2年間のインターンシップを通し、 学校現場で生徒の様子を見取る経験を積んでおきた いと考えています。教育実習とも違う長い期間での 実践の中で、自分が教員になった際にやるべきこと は何か、何ができるかを熟考していきたいと思いま す。この先で出会う生徒達のためにも、実のある大 学院生活にしていきたいです。2年間よろしくお願い いたします。



三上 泰生 みかみ ひろき

4月より、授業研究・教職専門性開発コースに入学しました三上泰生です。 郷土愛が強いのか、生まれてから今まで福井で生活し、学んできました。 昨年度までは福井大学教育学部中等教育コースに

所属しており、小学校一種、中学校一種(数学)、 高等学校一種(数学)を取得しています。

私は14年間バレーボールをしており、中学校時代は福井県選抜として福井を背負い戦いました。また、大学2年生時にはU-20のクラブ全国大会で優勝することができました。もともと教師を志したきっかけは、小学6年生の時に自分が選手としてプレーするより、監督として指導するほうがバレーボールを長く続けられるという考えに至ったことです。その後、至民中学校に進学し、70分授業や教科センター方式による探究的な学びを生成する授業を受け、自身もその授業を行える教師になりたいと思い、教育学部へと学びの歩みを進めました。

大学では CMT (Core Mathematics Teacher) のモニターとして、2年間公立中学校の授業名人の先生をメンターに学校インターンシップを行っていました。ここではメンターの先生が公立中学校でどのような探究的な学びを生成する授業を行っているのか、ま

たそこに至るまでの工夫を学ぶことを目標に参加していました。メンターの先生は、自身が行う授業について常に省察を行っており、そこで感じ取ったことや長い教職人生で学んだことを、経験の浅い私に丁寧に伝えて下さりました。

また主免教育実習では尊敬する指導教諭から「私が20年以上かかってできるようになった授業づくりに、実習生が20年かかるのでは教育の進歩はあり得ない。経験値の差を超えて授業づくりの課題を共有し共に考えていくことで、教育は進歩していけるのだ。」という言葉をいただきました。

これらの経験から、私は「探究的な学びを生成する授業はどのようなものか」、「熟達した教師から初任の教師へ、わざが伝達していくためにはどうすればよいか」という授業研究と教師教育が関心事となりました。

大学院ではこれらの関心事を理論として研究しながら、学校現場で実践していくことを目標としています。理論としては、私が中学校教員を志しているからといって中学校3年間の数学教育と狭く捉えず、小学校から高校までを見据えたよりよいカリキュラムデザインの考察を進めていきたいです。実践としては、学校現場の先生方からわざを吸収していくことを意識しながら、自分なりの新しい考えを共有し、新しい教育とは何かを協働で探究していきたいです。これから2年間、よろしくお願いします。



2 月ラウンドテーブルのふり返り

*ご所属は2020年3月末時点のものです。

ラウンドテーブルに参加して

福井市岡保小学校 小島 啓市

新学習指導要領に基づく教育課程は、働き方改革を念頭に置いたものが求められており、このことは、所属職員を監督する校長の立場として、日々頭の中を駆け巡っています。今回のB1のテーマが「働き方改革と学び合う学校づくりー組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメントー」ということで、

様々な取り組みの事例が聞けるということで参加させていただきました。

働き方改革については、学校では、行事をはじめとする教育活動の精選や校時の変更、校務の整理と合理化等を進めていますが、ひとつの学校の考えだけでの取り組みには限界があります。国や教育委員会が施策を出すことはもちろんですが、多くの学校

の取り組みを参考にして、自校版の働き方改革を進めていくことが大事だと考えます。今回のB1のテーマは、今回限りではなく、キックオフ的な回ということを進行の淵本先生が言われましたが、次回も新教育課程が始まってからの県内外の取り組みを知ることができるということで期待感が増しました。

管理職は、教育委員会の指示と指導のもと、校長会や教頭会等で情報交換をしていますが、今回のように、県教委と校長会だけでなく、文部科学省と教員研修を行う教育総合研究所という国、県、現場が一同に会して施策や考え方、取り組み等についての話を聞ける機会はなかなかないと思います。また、2校の中核を担う先生の素晴らしい実践も聞かせていただきました。それぞれの内容については省略しますが、参加して思ったこと、感じたことを羅列的ですが述べさせていただきます。

一番感じたことは、説明いただいたすべての方は、 教育の質向上を求め考えながら働き方改革を推進し ているということです。本県は、教育委員会が現場 の声を反映した働き方改革の施策を講じ方向性を示 しているので、学校として大変ありがたく思ってい

ます。ただ、改革には痛みが伴います。中には学校 の伝統として長年継続している行事の縮小や廃止を せざる得ない場合もあります。その場合、校長が実 施の是非を判断できる学校行事といえども、児童生 徒だけでなく、教職員や保護者、地区、関係機関に 理由を説明し、納得していただくことが必要となり ます。この役目を担うのは校長です。働き方改革を どうするかについて校長は率先して動きますが、独 断で決めるのではなく、教職員のボトムアップのも と業務を見直し、効率化・合理化を図っていくこと が大切だと考えます。長時間労働という働き方を見 直すためには、行事以外でもスクラップ&ビルドの 考え方で教育課程を見直していきますが、併せて、 教職員の主体性を出させる雰囲気づくりはもちろん、 全ての校務や役割を教員が抱え込むのではなく、周 りと連携・分担する意識やチームとして協働してい く文化を構築していくことが管理職の使命だと改め て感じたラウンドテーブルでした。第二弾も楽しみ にしております。

教師教育〈働き方改革と学び合う学校づくり〉 に参加して

学校改革マネジメントコース1年/福井市明倫中学校 前田 朋子

シンポジストの北川校長先生の勤務校の明道中学校は、私の母校であり、通勤路にある。私が帰途に着くときは職員室の電気が消えていることの方が多い。これまでに同僚から、明道の働き方改革に関する取組を聞くこともあったが、このラウンドテーブルで北川校長先生から家庭訪問の廃止、朝の欠席連絡受付開始時刻決めなど、具体的な取組についての話を聞くことができた。「特に問題はなかったですか?」と休憩時間に北川校長先生にお聞きしたところ、苦情はなかったそうである。

シンポジウム後のグループセッションでは、他校の先生と自校の働き方改革に関する情報交換を行うことができた。県内の中学校の先生から、定期テスト2日目に部活動を中止にしたことについての話があった。実施する時、反対した先生もいたそうである。しかし実施してみて、テスト直後で疲れていた生徒にとってゆとりができたこと、職員にとっては採点基準を決める教科会を部活動が終わってからしなくてもよくなったので、午後教科会を済ませ採点

にとりかかれたというよさがあったということであった。なかには年休をとった先生もいたということである。とにかくまずは実施してみようということで取り組み、実施してよかったと実感できたことが大きかったそうである。

他校での取組を間接的に聞くことはあったが、取り組んでみて実際はどうだったのか、不都合なことは生じなかったのだろうかと思っていた。しかし今回のラウンドテーブルでは、他校の具体的な取組や取組までの経緯、実際取り組んでみてどうだったのかといったことまでを直接聞くことができ、参加してよかったと感じる。もっと聞きたいと思うぐらい、あっという間の時間であった。

そして他校の取組を具体的に知るだけでなく、私 自身が自校で取り組めることはないか考えるきっか けにもなった。ラウンドテーブル後に自校で教育課 程検討委員会(来年度の行事等を検討する会)があ り、家庭訪問をなくしたらどうかと提案した。家庭 訪問なしという案は昨年も提案したが、今年度は実 施することになった。会では反対の考えの先生もいたが私は、家庭訪問をするまでに生徒の住宅位置を確認することや効率よくまわる順を考えることなどの準備に時間が費やされること、新任の先生はまだ校区になれていないので交通安全面でとても気をつかうことなど、具体的にどのようなことが負担感につながるのかを述べた。他の先生からテスト検討の時間を確保した方がいいという、家庭訪問なしに賛成の意見もあった。担任としてやはり一度は自宅を見ておいた方がいいのではという、家庭訪問継続の意見も出た。最終的には、これまでと同様生徒指導上必要な場合、年度初めの早い時期に家庭訪問をすると共通理解を図った上で、5月の家庭訪問はなしということになった。

この原稿を書いているのは、臨時休校中の例年より比較的時間がある時である。数週間後には新年度が始まり、また慌ただしい日が始まる。しかし目の前にある仕事をこなしていくのではなく、業務改善について自分なりに考え、周囲の先生と話題にして、よりよく変えられることはないかといった視点をもちながら業務に取り組んでいきたい。また、働き方改革のねらいは、「教師のこれまでの働き方を見直し、自らの授業を磨くとともに、その人間性や創造性を高め、子供たちに対して効果的な教育活動を行うことができるようにすること」である。業務改善によって生み出された時間を、授業研究やテスト検討など教科会などチームで学び合う場にしたり、自分の教材研究をしたりする時間にしたりして、授業力向上を図っていきたい。

「ラウンドテーブル」に参加して

福井市和田公民館館長 北島喜一

今回は、図らずもシンポジストという大役を仰せつかり、大変緊張の中での発表でしたが、何とか七~八十%は思いを伝える事が出来たかなと思っています。

ラウンドテーブルへの参加は始めての事でしたが、 素晴らしい体験をさせて頂き大変光栄に思い、感謝 いたしております。

今回、"持続可能な、コミュニティをコーディネートする"をサブテーマとして"地域のこれからを拓く担い手をいかに育てるか"

という題目のもとに、長年の地域における色々な 取り組みについて紹介させて頂きました。事業を継 承していくことも大切ですが、地域が活性化する為 には新たな事業を発掘すると共に、地域の方の多様 で多層なコミュニティの学びをコーディネートする ことが重要だと思います。その為には避けて通れな い世代継承の問題やこれからを拓く担い手など、 色々な問題点はありますが、日頃の小さな親切の種 まきが大事で、その種が小さな芽を出し、その芽を 大切に育て、花をつけ実がなるまで、お互いの心と 心の繋がりを持つことで、自然と解決していく問題 だと思います。

もう一人のシンポジストである福井市国見地区地域担当職員の西澤公太氏のお話では、西澤氏は木田地区の方でありながら国見地区を担当し、地域おこしを第三者としてサポートしているとお聞きし、人

口も少なくお年寄りも多い中で、過疎化にならないような取り組みを後押しする大切な仕事をされている事に頭が下がる思いであり感動しました。

また、フオーラムでは、福井大学生大友香奈さんから、新しい事へのチヤレンジとして、学生達が企画・運営する「探求ネットワーク」活動に興味を持ち、様々な考えを持った面白いひらめきのメンバー達と共に、子供たちのやる気!と繋がること、協力を促すこと、思いやりの心を育てることを視点として、子供たちと楽しく交流したという発表がありました。また、同じ大学一年生の前嶌一澄さんからは、

「仕事する中で基礎となること」をテーマとし、その中で「繋がること」と「経験」の二つに着目して間き取り調査をした様子などのお話をお聞きしました。二人の将来の目標が教員とのことで、コーディネート役の永岩先生からお二人に対し、教員経験者の立場からの色々なアドバイスや、働き方改革の問題で教員の仕事も大変だが、くじける事なく目標に向かって頑張って欲しいとの励ましがあり、私も心から応援したくなりました。

和田地区には、"和田発展不己" (わだはつてん やまず) という合言葉があります。私は、この言葉 を胸に積極的に地区民と一体となり、地域がますま す活性化するよう、未来を拓く次世代の若者と手と 手をつなぐ公民館を目指していきたいと思っています

ラウンドテーブルでの感想

福井市議会事務局 西澤公太

今回、ご縁あって、福井ラウンドテーブルにシンポジストとして参加させていただきました。今回はコミュニティソーンで、「福井市国見地区での地域担当職員の関わりについて」というテーマで発表をさせていただき、非常に貴重な経験をさせていただいたと思っております。

例年であれば、コミュニティゾーンでは、福井市 内各地区の公民館職員さんがご自分の地区の事例を 紹介するのが定番であったという風に聞いておりま す。ところが、今回は市役所の職員が発表する。ま してや自分の住んでいない地区について発表すると いうことはこれまであまり無かった事例かもしれま せん。

ここで、簡単に福井市の「地域担当職員制度」について、ご紹介します。

この制度は市職員が住民主体の地域づくり活動に参画するなど、地域との関わりを積極的に進め、地域の様々な課題への対応や、協働のまちづくりの更なる推進を図ることを目的に、平成28年5月に開始しました。地域担当職員の仕事は、地域課題やニーズの把握、課題解決に向けた方策の検討、地域づくり事業の拡大・発展の支援などです。そのための活動として、地区の会議への参加や、地区行事(イベントなど)の企画や運営のサポートなどを行っています。

地域担当職員の配置基準は原則として、30~40 歳代の市職員が各地区(公民館区域)2人に配置されます。地区内または近隣地区在住が基本ですが、私のように近隣地区ではない地区の担当となる場合もあります。

今回は、国見地区内のまちづくりの担い手の世代 交代と、居場所・役割をどのように作り出すかの2 点について、他のシンポジストの方々とお話させて いただきました。

まず、国見地区内の世代交代をいかに作り出すかについてです。どうしても「世代交代」というと、バトンを「渡す」人と「受ける」人の2つに分けて考えがちではないかと思います。この考えですと、バトンを受けた人は重い責任を背負って、地域を引っ張っていくような印象を受けてしまいますし、そのようなバトンは誰も受け取らないのが本心かと思います。なので、世代交代という考えから一度脱却し、地域に関わるためのきっかけとコンテンツ(地域に関わりたくなる地域の自主的な催しなど)をいかに作り出すかが今後の地域運営において重要になってくるのではないかと考えています。

国見地区の皆様と地域担当職員が協力して行っている取り組みの1つに「地域づくりミーティング」という取り組みがあります。これは、地区の活性化を担う各代表者と地域担当職員が地区課題等について話し合うものであり、地域と地域担当職員を繋ぐ機会の1つでもあります。

国見地区においては、この場所が世代を超えて将 来の自分たちのまちの在り方を考える場所になりつ つあり、今後の展開が非常に楽しみです。

最後に、国見地区には様々な方がいて、皆さん様々な背景を抱えています。地域の人々それぞれが、互いの価値観や暮らしを理解し、認め合うことが地域づくりを進める第1歩である気がします。

A Reflection of the 2020 Fukui Roundtable Spring Sessions, February 15 and 16, 2020

ALT, Fukui City Board of Education, Michael Kuziw

I had the pleasure of attending the 2020 Spring Sessions, hosted by University of Fukui. It was an honor to be among some of the leading educators and thinkers in education from across Japan. Day One

began with a knowledge fair in the form of a poster presentation to the theme of 「実践し省察するコミュニティ」. The poster presentation, titled,「個別学習の見えるシステム化に関する実践」 was very

interesting to me, highlighting the importance of longitudinal speaking practice improvement over a 3-year period at a Sakai City Junior High School. I was inspired to include a similar system in my own practice when I begin to work as an ALT at a Junior High School. Following the poster session, I heard Principal Kobayashi give a talk about inquiry learning at the Junior High School level and the importance of learner development. She emphasized the importance of moving away from teaching the ability to answer questions correctly, towards a system that allows students to find problems and learn how to solve them and take action, developing students' ability to learn how to think with a focus on peer-learning. This talk gave me real faith that the education system in Japan and specifically in Fukui is focused on the development of a 21st century learner. The day ended with a group discussion about the needs required to appeal to others' learning and interests, while considering the importance of maintaining the aim for improving academic ability.

Day Two required us participants to be observers and audience members to our fellow group members, helping support their practice and learn from their experiences. Collaborating among a variety of educators who work in various capacities allowed me to consider different perspectives, integrating their suggestions into my own project, which I had the opportunity to introduce to the group. By describing the impetus of the project to the other group members, I was able to consider the effectiveness of conducting research at the elementary school level and the potential collaborations necessary to fulfill such a project. Capturing the attention of a diverse group who work in various disciplines gave me confidence as a researcher and educator that I feel I benefited from. Finally, thanks to Ms. Pauline, I learned about the importance of being an effective moderator- observing and listening actively and providing positive, constructive feedback. I would like to thank everyone who helped contribute to my positive experience at the 2020 Spring Sessions and I look forward to seeing familiar faces and collaborating with others at the upcoming 2020 Summer Session.

Reflections on Roundtables for Communities of Practice and Reflections, featuring teacher practices of Myanmar, Japan and Philippines

Research Student, University of Fukui, Michael Wilson I. Rosero

I participated Spring Roundtable 2020 on February 15-16, 2020 held at the University of Fukui. On the first day, I presented my poster about the Philippine's teacher performance appraisal system called the Results-based Performance Management System (RPMS) in the knowledge fair. The presentation was in the Japanese language as it served as one of my final requirements of my class. On the second day, I participated in one of the roundtable cross sessions

composed of educators from Myanmar, Japan, and Egypt. During the roundtable, each of us presented our own practices, experiences and reflections on what we have learned from the discussions.

From Naing-先生's presentation, I learned that in Fuzoku, teachers take part in research meetings in which they talk about their teaching practices throughout the whole year. Such discussions are focused on the student learning and achievement,

which contribute curriculum and school to management. Teachers learn together with their colleagues through establishing professional learning communities (PLCs). These PLCs are crucial for lesson study, a model for professional development that is popular in Japan. I've been interested in how lesson study works in a school and Naing-先生's presentation gave me an overview of what to expect once I start my internship. I was not trained formally as a teacher but I am excited to collaborate with teachers and learners, especially in terms of their professional development.

Another meaningful discussion was that of Kazuya Numata-先生. Numata-先生 teaches science and technology in a private junior school in Kyoto. What makes his teaching style interesting is that he doesn't follow a particular plan or curriculum and he teaches one unit for the entire term. But he makes his activities so authentic and real life-oriented for students to learn enthusiastically. Students learn how build bridge models, experience real bridges and develop a deeper

understanding of thought and philosophy of infrastructure and human relations. Numata-先生 also visited the Philippines several times and conducted teacher trainings for Filipino teachers.

I presented to the group the RPMS, the teacher performance assessment system of the Philippines. I gave the context of the Philippine education and the recent implementation of a professional standards for teachers, which became the framework for the professional development of teachers and other human resource systems related to teaching profession such as recruitment and hiring, teacher induction, rewards and recognition, among others. Being able to participate in the roundtable discussions gave me an opportunity to share the recent initiatives on teacher quality and professional development in the Philippines to other educators from different countries. The questions they raised also allowed me to consider different perspectives on how to approach my research study regarding the role of school leaders in teacher professional development.



お知らせ

教職大学院ではニュースレターを発行しています。執筆作業は自分自身に問い返す作業です。インターシップやカンファレンス、 日々の実践を通してその時々に考えたことを、自分の記録としてだけではなく、読み手を想定して文字に残していきます。 みなさんの学びの一環として、前期、後期にそれぞれ1回、執筆の機会を持っていただいております。前期の予定は以下の通りになっています。原稿をお待ちしております。テーマ、文字数、提出先については別途お知らせいたします。

2020年度 ニュースレター計画案(院生用)						
号 (発行日)	原稿締切	院生自己紹介			M2·M3の院生から★	
132号 4/25(土)	4/19(日)	鈴木 克学 三上 泰生 畑中 良太 川西 雄太郎 太刀川 京 大西 美穂	教職専門性開発 1 福田 裕理 仲村 俊本 荒木 裕里香 岩城 つばさ 蟻塚 知都 川﨑 太地	7人 木原 万由子 揚原 佑 加藤 もも香 高島 伊吹 今中 勇樹	133~138号の 執筆については その都度、テーマを 指定いたします。	
135号 5/16(土)	5/8(金)	ミドルリーク 武居 悠輔 牛腸 つぐ実 西川 くるみ 菅野 多岐子 岡山 佳耶 前田 美知惠	ボー 11人 福田 亘哉 仲保 彰人 加藤 真由 森川 禎彦 大菅 暢子	マネジメント 6人 宮口 正樹 小林 正尚 前川 壽人 梶川 和則 早瀬 善理子 白崎 賢一	清水 広平 桑原 本 玉村 桃 卓 京田 卓 永田 卓 本東 135号テー	
136号 6/20(土) RT特別号	6/12(金) 印刷所へ				カンファレン 加して	ノス準備会に参
137号 7/4(土)	6/26(金)	ミドルリーク 久保田 美千代 法土 明子 黒津 彰紀 伊井 昌彦 宮崎 亮太	学一 10人 金森 久貴 川﨑 耕介 Tjipto William Wongsowajar Roopen Charmoyl Thornton Ryan Joshua	マネジメント 7人 田渡辺 博英 時期 で 日間で 日間で 日間で 日間で 日間で 日間で 日間で 日間で 日間で 日間	石田 涼 吉田 沖上 半上 大野 悌彦 小俣 亜貴子	竹澤 尚美 大石橋 義治 伊藤 康弘 嵩谷 浩太郎
138号 7/21(火)	7/10(金)	森阪 美文 遠藤 健 松見 眞希 大野 隆次 林 雅則	マネジメント 15. 野口 大輔 三保谷 遼 川端 宏明 吉田 清子 伊部 雅之	Rosero Michael Wilson Isaac 大野 靖幸 對比地 覚 大井 和彦 坂東 由美	藤本 紗奈 村林田 苑 兼松 かおり 西岡晃未 伊達	坪川 美穂 青木 喜一郎 向山 博昭 齋藤 雅実 前田 朋子

【編集後記】ご入学おめでとうございます。本来ならば、開講式の場で、皆さんと一緒にこれからの教職大学院での学びの出発点を確認し合うはずでした。その機会をもつことができず、大変悔しい思いでおります。けれども、今回、さっそく送って下さった新M1の皆さんの学びへの意欲にあふれる原稿を大変うれしく思いながら編集しました。このような時だからこそ、よりいっそうこのニュースレターが皆さんの学びを共有し合い、互いの実践に思いをはせ合う場となるよう、ニュースレターの編集作業に取り組んでまいりたいと思っています。(Y, P)

教職大学院 Newsletter No.132

2020.4.25 内報版発行 2020.5.29 公開版発行

編集・発行・印刷 福井大学大学院 福井大学・ 奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学 連合教職開発研究科 教職大学院 Newsletter 編集委員会 〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp